

安物のカメラでも腕次第

柳平：ところで先生、もう、とっくの昔にハードウェアの完成してしまった私どもは、もう手遅れで、どうにもならないものでしょうか。

時実：そんなことはありません。人間の脳の働きは、ハードウェアよりも、ソフトウェアの働きのよい悪いにかかっています。そして、そのソフトウェアは、死ぬまでずっと向上させていくことができるのです。例えば、今ここで写しているカメラはアサヒペンタックスですね。10万円はするでしょう。一方、名もない2、3千円のカメラがあります。ハードウェアという点だけでは、明らかに10万円のカメラの方が優れています。しかし、写し手がへただったら、いくら10万円のカメラでも、優れた写真はできません。その反対に、安物のカメラでも、性能は少々悪くても、写す人の腕さえよければ、芸術的な優れた写真が写せるでしょう。

柳平：はい、よくわかります。

時実：IBM や富士通で出している超大型のコンピューターは、確かに優れたハードウェアです。しかし、それに伴う立派なソフトウェアが備わらなければ、何の用もなしません。反対に、小型のコンピューターでも、ソフトウェアさえ立派なら、立派な仕事をしますでしょう。……私にソロバンを持たせてごらん下さい。私には、立派なコンピューターよりも、ソロバンの方が早く答えを出せるでしょう。いくら立派な百科事典があっても、それを使う方法を知らなければ役に立ちません。だからハードウェアが優れていた方がよいには違いありませんが、すべてではないのです。ソフトウェアの方が問題です。それは、一生かかって開発されるものです。だから、脳の回路ができあがってしまったのだからもう手遅れだ、などと悲観することは決してありません。